



私も京都外大図書館を応援します(7)

「外大の蔵書構成は 建学の精神の顕れ」

みずたに
水谷

もとむ
求さん



はじめてこの大学に来ていただいたのは、平成9（1997）年の本学創立50周年記念稀観書展示会「日本の国際化を進めた50冊」の時である。それ以後、毎年開催している展示会には毎回お越しいただいている。

「率直に申し上げて、このような素晴らしい貴重書が京都外大にあるとは思っていませんでした。それを活用しながら、永久的に保存されようとする努力は並大抵のことではないです。非常に感動しました」とお褒めいただき、毎年来ていただいた時に図書館からお渡しした数冊の展示目録を見せていただいた。ご自身が最も印象に残っているとされる『日本の国際化を進めた50冊』や『ペリーがやって来た！黒船来航と日本』、『ハーンとモラエス』などには、欄外に細かい文字で所狭しと書き込みがされている。「関連する事柄を書いているだけです」と謙遜されるが、展示目録の解説を基本にして、ご自分でお調べになったことを補充し、発展させておられるとのことである。

「私の歴史好きは、ただ日本の歴史を知りたいからです。外大の図書館は対外交渉史という観点から書物を集めておられる。外国人が日本をどのように見ていたのか、正直言って、この見方は私にはなかった」とご自分のご研究の推移を振り返られる。そして、「これが、言語を通じて世界の平和を追求する思想の顕れですね」と、本学の建学の精神と蔵書構成の関連を評価していただいた。

「若い時から、日本史に関心があって随分たくさん本を買い込み、定年退職になったら勉強しようとしていました」。やがて時が来て、今は大佛次郎おさらぎ じろうの全10巻からなる大著『天皇の世紀』は5回目の読み直しをされている。「ここに出てくる人物を掘り起こして、その人の経歴と業績を見る。まだ、60%しかできていません」といわれる。

どこで、そのようなご研究をされているのかを尋ねると、「調べる時に図書館の資料が必要になるので。図書館の司書は利用者に対し、親切に解りやすく説明してあげてください。」また、「利用する人も、解らなければ図書館の方に聞くことが大事」と、ご自分の体験から得られた図書館利用法も語っていただいた。「在野の研究者ですね」と問い掛けると、「私もそうなりたい（笑）」と巧くかわされてしまった。

この他、公共図書館や資料館などが開いている講習会を何回も受講され、古文書の解読法も心得ておられる。お話しをお聞きした纏めに、「生ある限りは、ここ（本学図書館）へ来て世界の書物の原典を見たい」と。凛として野に咲く一輪の花のような風格を滲ませた、力強いお言葉をいただいた。

（聞き手・文）奥 正敬